

## ● 研究所 7 階に引越し



猛暑の8月11日、研究所は1階から7階へ引越しを行った。研究所があった部屋は「国際交流推進センター」となる。1階は外部の人にもわかりやすく、研究所や学びの会の活動にとって好都合だったが、大学の「方針」ということで夏休み中の引越しを余儀なくされた。引越しは業者により手際よく、特別研究員の奮闘により片付けもスムーズに進んだ。なにもしないように、「腰痛」の身には引越しはやはりこたえた。

エレベーターで7階に上がると、例の研究所の大きな看板が目に入る。研究所は前よりスペースがすこし広くなり、真新しい机と椅子が並べてある。とりわけ赤色の椅子が研究所の雰囲気をもくしている。選定してもらった事務室の方に感謝したい。1階と大きく違うのは、窓やベランダからの眺めが抜群なことだ。緑に囲まれた古墳をはじめ、コンパクトなキャンパスが一望できる。遠くには名駅の超高層ビル群も見渡せる。北からの風も心地よい。紅葉や春の桜が今から楽しみだ。

予期せぬ引越し「騒動」により、研究所が看板倒れにならないよう、7階にふさわしく視野を広げた研究活動を推進していきたい。ぜひ一度、新しい研究所を覗いてみてください。



(山田明)

## ● Human & Social サイエンス・カフェ

第14回 サイエンスカフェ 7月20日(日)

テーマ: 「カントと人間 - 剛と柔 -」

講師: 森 哲彦教授

講師の話や用意された報告文、資料は、今日生きるカントに焦点があてられ、しかも真心がこもっていて、私としては大変よかったと思う。しかし参加者の方から「これは学会ではないのだから、現代人にとって問題である、どうしたら社会がよくなるのか、この所で話かしてほしかった」という発言があった。森先生はそのことを話されたのであるが、不鮮明な所あって、意が十分に伝わらなかったからこういう発言が出たのだと思う。森先生は、カントがルソーの「人間愛」思想に触れ、一般者を低く見る研究者然としていた己の生き方を反省し、差別主義でなく、人間愛に満ちた生き方をしようとして、そのためには人間が自由で平等である根拠を示す必要があるわけで、カントは「3 批判」でその根拠を示し、その成果においてカントは人間愛に満ちた世界を「人間学」として叙述したと語られた。

資料が膨大であったことも起因して、不鮮明に終わったことは反省材料である。

単語に「水深ければ底見えず、水浅ければ大魚を容れず」(水深不見底、水浅不容大魚)とある。思想を語るにはある程度の難しさは避けられないのである。弁解のようでおこがましいが、了解していただきたく思う。そして皆さんの辛抱をお願いしたい。

久田健吉(市民学びの会会員・哲学サークル担当)

第15回 サイエンス・カフェ 8月24日(日)

テーマ: 「自助・共助・公助の福祉公共哲学」

講師: 福吉勝男教授

冒頭、優秀な教え子の就職形態が不安定な契約社員に留まっている現状が投げかけられました。

福吉勝男「公共福祉志向の思想-その現実化の新たな試み」人間文化研究所年報第3号の「社会関係資本」を中心として語られました。

かつて「社会資本」とは、主にハードな部門を指していました。「社会関係資本」とはソフトな部門も含める考え方です。そして、「自助・共助・公助」の意味を身近な共助にあたる生活協同組合・労働組合・市民

活動などの例を折り混ぜ分かりやすく語られました。「自助・共助・公助の福祉公共哲学」は、他分野の研究にも参考になります。

冒頭のお話は、自助だけで解決できない状況にあるのを最後に痛感しました。

中村裕子(人間文化研究所特別研究員)

#### 15 回サイエンス・カフェ参加者の感想文から

- ・大学人(知的労働者の代表)としての社会的発言と問題提起はすばらしい。
- ・派遣で働いています。正職につけないことは、自己責任として始末されてきて、思考停止にさせられてきたように思う。しかし、それは間違っているのではないかと？30代にまん延する絶望感は、正社員でも非正社員でも分断されることなく、今こそ連帯すべきではないかと思う。その意味で本日の「社会的ネットワーク」が大切なのだと思いました。
- ・一番印象に残ったのは、契約社員の問題です。正社員ならとうとう自助努力している若者、次世代の人々に対して、どう公助していくのが緊急の問題と思った。
- ・経済至上主義の現代社会に於いて、今後自助・共助の必要がさらに一層重要な意義を持つように思われる。
- ・全体的に理解しやすかった。「活私開公」の話が良かった。
- ・たいへん興味深く拝聴しておりました。話と議論の組み合わせも良かった。



#### ● マンデーサロン

第16回 マンデーサロン 7月14日(月)

**テーマ: 「オリンピックと競泳と水着」**

**講師: 斉藤典子さん**

(サイトーアクアティックアカデミー代表、人間文化研究所特別研究員)

古事記・日本書紀における水浴から鎌倉・江戸時代に誕生した日本泳法、近代オリンピックと競泳、そしていま話題のS社の水着「レーザーレーサー」。日本人が長い歴史のなかで祭礼・水練・水泳と形を変えながらいかに「水」と親しんで来たか、そして現在なぜ水着が問題となっているのか。歴史的な経緯を順に追い

ながら、明瞭、快活に語っていただきました。

斉藤さんもご自身のご活躍と経験から「水着一枚でやってきた!とおっしゃったように、競泳は用具のパフォーマンスに左右されず、実力で勝敗が決まる公平な世界と思われてきました。しかし、その水着一枚が勝敗に影響する事態になったことについて、選手の身体への影響と公平性の問題から懸念されます。密着して筋収縮による隆起を矯正する水着が選手の身体に及ぼす影響に関する情報の不十分さ、そして水着が高価・希少であるために北京オリンピックに際して入手できない地域や選手が出てくることでした。話題のS社の水着の変わりに、M社の競技用の水着に触れる機会が用意されました。

現在、斉藤さんはおもに乳幼児を対象とし、健やかな発達の保障と生活領域の拡大を目指し、水中運動とリズムを融合させた「アクアミクス」を考案されて実践と研究に励んでいらっしゃいます。映像とともに実践の様子を紹介していただきましたが、子どもたちの生き生きとした表情は、活動がいかに楽しいものであるかを物語っていました。子どもや水泳に対する温かいまなざしを感じ、競技種目としてだけでなく子どもの心身の発達に寄与する楽しい活動としての水泳のあり方について考えさせられるお話でした。



渡邊 明宏(人間文化研究科博士後期課程)

#### 今後の研究所主催行事の予定

##### ● Human & Social サイエンス・カフェ

- ・9月21日(日) 田中敬子  
「アメリカン・ゴシックの伝統」
- ・10月19日(日) 山本明代  
「ハンガリー文化の魅力を探る」
- ・11月30日(日) 土屋勝彦  
「オーストリアの現代作家たち」

##### ● トーキング・カフェ

4月からの新企画として、「トーキング・カフェ」を毎月第2・第4木曜日の15時から18時まで研究所で開催しています。研究領域の違う院生や教員と出会う、つながりを作れる「場」として企画されたものです。担当は研究科08年3月修了生で研究所特別研究員の重原淳子さんなどです。

10月9日(木)人間文化研究所「お披露目パーティ」を企画しています。

名古屋市立大学人間文化研究科人文社会学部国際シンポジウム

# 観光まちづくりの国際比較

ペーチ(ハンガリー)と名古屋から考える

2010年に「ヨーロッパ文化首都」が開催されるハンガリーのペーチと名古屋市の観光政策を比較し、都市政策における観光の位置づけ、文化資源と観光の可能性・問題点について議論し、魅力的なまちづくりについて考えます。専門的な内容をわかりやすく、映像などを用いて説明します。どうぞ、お気軽にご参加ください。

**日時:2008年11月15日(土)14:00~17:00**

**場所:名古屋市立大学1号館(人文社会学部棟)1階会議室**

定員:60名(下記の間合せ先にFaxかEメールでご予約ください)

- 「ペーチの都市政策と観光 ヨーロッパ文化首都2010年ペーチの計画とその可能性」  
パプ・ノルベルト (ペーチ大学地理学研究所地中海東部・バルカン研究センター長)
- 「名古屋市の観光政策と実践」  
鬼頭 敏広 (名古屋市市民経済局文化観光部長)
- 「名古屋の観光まちづくり」  
山田 明 (名古屋市立大学人間文化研究所所長・人間文化研究科教授・  
「名古屋の観光推進を考える研究会」座長)

コメンテーター:鈴木広和(大阪大学准教授)

吉田一彦(名古屋市立大学人間文化研究科長・人間文化研究科教授)

\* 報告は、日本語およびハンガリー語(日本語通訳つき)

主催:「ハンガリーの文化的多元性」研究会

後援: 駐日ハンガリー共和国大使館、ハンガリー文化センター

愛知県ハンガリー友好協会、名古屋市立大学人間文化研究所

間合せ先:名古屋市立大学人間文化研究科・人文社会学部 山本明代研究室

Tel&Fax 052-872-5879

yamamoto@hum.nagoya-cu.ac.jp

\*本セミナーは2008年度名古屋市立大学特別奨励研究に採択された「文化的多元性の保存と発展に関するペーチ大学(ハンガリー)との共同研究」の一環です。



## 国際シンポジウム「観光まちづくり」の開催について

人間文化研究科准教授 山本明代

今年度本学の特別研究奨励費に採択された「文化的多元性の保存と発展に関するペーチ大学(ハンガリー)との共同研究」の研究会が主催し、11月15日に国際シンポジウム「観光まちづくりの国際比較 ペーチ(ハンガリー)と名古屋から考える」を開催する計画を立てています。2007年1月に本学とハンガリーのペーチ大学が大学間交流協定を結んだことから、研究者間の交流が始まり、昨年度は市民向けのセミナーを開催しました。

ペーチ大学があるペーチ市はハンガリーの首都ブダペシュトから180キロ南にあるドナウ川以西地方バラニャ県の県都で、人口15万6千人、ハンガリーで第5番目の都市です。EUが主導する「ヨーロッパ文化首都」の2010年の開催地として選ばれ、現在このイベントの開催に向けた準備が進められています。ペーチには2000年にユネスコの世界遺産に登録された初期キリスト教徒の墓跡やオスマン軍占領期に建設されたモスクやミナレットなど数々の貴重な文化的遺産があり、地域の歴史と文化の発掘・保存と都市の観光政策を結びつけ、「境界なき都市(The Borderless City)」として、文化的多元性を有する地域文化を世界に向けて発信しています。

11月に開催するシンポジウムでは、ペーチ市と名古屋市において共通の課題となっている観光に焦点をあて、都市政策における観光の位置づけ、文化資源と観光の可能性・問題点について議論し、国際的な比較を行いたいと思います。ハンガリーのペーチ大学からは、政治地理学の専門家パプ・ノルベルト先生をお招きし、ハンガリーだけでなく、EUとの関係、東欧・バルカン諸国を含む地域における都市の戦略的位置づけや機能といった広い視点からペーチの都市政策と観光について論じていただきます。続いて、名古屋市民経済局文化観光部長の鬼頭敏広氏には、名古屋市の観光政策とともに名古屋城本丸御殿復元事業などを例に実際に行われている施策についてご紹介いただきます。最後に、本学において「名古屋の観光」研究プロジェクトを主宰されている人間文化研究所長の山田明教授に「観光まちづくり」の実践と可能性について広くお話いただく予定です。詳しくは、また研究所のホームページなどでご案内いたします。ぜひご参加ください。

### 編集後記

「ヒートアイランド」名古屋に秋の気配も。猛暑の8月はマンデーサロンの斉藤典子さんによる「オリンピックと競泳と水着」の話の思い出しながら、競泳など北京五輪をテレビ観戦。話題のS社の水着の効用は？記録ラッシュの競技とともに、開閉会式など多くのことを考えさせられました。

マンデーサロンの企画募集。「タンゴ」の演奏などを企画していますが、どんどん提案を。先の「水着」の企画は、トーキング・カフェの話から実現したものです。今年度の新企画トーキング・カフェにも、院生を誘って是非ご参加を。10月9日(木)には、新装研究所「お披露目パーティ」を企画しています。

2年目になるサイエンス・カフェは、だんだんと定着。参加者からも、おおむね好評なようです。中日新聞などに案内が載ると、すぐに研究室に電話がかかってきます。丸善で知ったという人も増えてきました。会場の関係で20名前後が「適正」規模ですが、キャンセルや当日参加もあり、「数合わせ」はなかなか困難です。(や)